# 子どもが主体的に取り組む器楽の活動

## ～「学級全体で表現の工夫をして合奏する」事例をとおして～

内垣　美佳

本研究では，学級全体で曲想にふさわしい表現の仕方（旋律の特徴，強弱．速度等）を工夫して合奏する活動を通して，「させられている」のではなく，「このように演奏したい」と思いや意図をもって主体的に器楽の活動に取り組む子どもの姿をめざした。学級全体で合奏することの意義，課題設定の在り方，鑑賞と関連付けた題材構成，聴き比べる観点から子ども主体の器楽の活動の在り方を探っていく。

**キーワード**：教材「マンボ No. 5」，合奏，表現の工夫，主体的，器楽の活動

### １．研究の目的

本研究の目的は，学級全員で合奏し，考えた表現の工夫を音や言葉で仲間に伝えたり，共有し合ったりする活動を通して，子どもたち自らがより良い表現を求めていく力を育てることである。

器楽の授業は，より良い演奏をさせたいという教師の思いが強くなり，表現の工夫を考えさせるよりも，技能を高めることを重視してしまいがちである。グループではなく学級で合奏することによる成果と課題を明らかにしながら，子どもが主体的に取り組む器楽の活動について探っていきたい。

### ２．研究の方法

#### ２．１．グループではなく，学級全体で合奏する

これまで，学級を２～３グループに分けて合奏することが多かった。グループで合奏することによって，それぞれのグループや個人に問いが生まれ，互いに聴き合いながら表現を高めていくことができる。しかし，その反面，グループによって演奏が異なるため，学習が進むにつれて課題が設定しづらく，設定をしても課題を学級全体で共有することが難しかった。そこで，今回は，学級全員（３０人）で合奏をする。学級で一つの曲を演奏することによって，生まれてくる気付きや問いを音や言葉を使って全体で伝え合い，共有しながら課題を設定し，取り組んでいけるようにする。

#### ①振り返りシートの活用

合奏では，もっている個人の技能や，担当する楽器の違いによって，必要とする練習時間やつまずいたりする箇所が異なってくる。今回は，パートや個人の練習の進行状況を書かせることに重点を置き，子どもの練習の過程をみとり，次時の授業に生かす手立ての一つとする。

#### ②同じ楽器を担当する仲間同士で集まって練習したり，表現の工夫を考えたりする

リコーダーや鍵盤ハーモニカができないと自分には演奏の技能が無いと思い込んでしまい，楽器を演奏することに意欲をもてずにいる子もいる。しかし，そうではなく，打楽器をリズムにのって演奏することができるのも演奏の技能の一つである。楽器決めは，できるだけそれぞれが「やってみたい」と希望する楽器を担当させる。複数が同じ楽器を希望する場合は，楽器の数によって曲の途中や演奏ごとに交代するなどの工夫をさせる。

まずは個人練習ではなく，同じ楽器を担当する仲間同士で集まって練習をする。また，自分の担当する楽器の特徴を生かした表現方法を，そのグループで集まって考えさせる場面をつくる。同じ楽器を担当することで，教え合う姿が生まれたり，同じ視点から演奏方法や表現の工夫を考えたりすることができるであろう。自分のパートに着目することで，曲全体を見渡して表現の工夫を考えることもできるのではないだろうか。

#### ２．２．自分たちの演奏を録画して，プロの演奏と聴き比べる

楽器編成は異なるが，プロの演奏家が演奏しているＣＤやＤＶＤを視聴することによって，楽譜だけでは感じ取れない曲想を感じ取らせる。自分たちが合奏する曲をプロの演奏家はどのように演奏しているのか，楽器の演奏の仕方や演奏者の表情などにも着目させて，自分たちの演奏に生かせられるようにする。

次に，自分たちの演奏を客観的に聴くために，演奏している様子を録画する。子どもたちに課題意識をもたせるためには，何かしらの刺激が必要であると考える。自分たちの演奏を録画したものを視聴するだけでなく，さらにプロの演奏と聴き比べることによって，

自分たちがどのような音楽表現を求めていきたいのかということが，より明確になるのではないだろうか。課題設定をしたり，問いを引き出したりするためにも効果的ではないかと考える。

## ３．授業の実際

ここでは，平成28年10月（教育研究発表会）に行った題材『曲想を生かして合奏しよう～表現の工夫がいっぱい「マンボNo.5」』（５年生）の実践について報告する。

### ３．１．題材設定の理由

本題材では，曲想やその変化を感じ取って聴いたり，思いや意図をもって曲想にふさわしい表現の仕方を工夫したりすることをねらいとする。

第一次では「威風堂々　第一番」（エルガー作曲）を鑑賞し，曲想とその変化に着目して聴くことによって，楽曲の構造を理解できるようにする。また，どのような変化をしながらリズムや旋律が反復しているかに気付かせ，鑑賞で得た学びを第二次の「マンボNo.5」（ペレス　プラード作曲）の合奏に生かすことができるようにする。

楽器を演奏することを苦手と感じている子も多いが，楽曲に魅力を感じて「この曲を演奏したい」と合奏への意欲を高めてほしい。さらに，仲間と表現の工夫をしながら演奏する楽しさ，喜びを味わってもらいたい。そのためにも，ＣＤやＤＶＤでプロの演奏を視聴することは，子どもたちにとって大きな刺激となると考えている。試行錯誤しながらどのような音楽にしていきたいかと思考・判断する過程を大切にする中で，技能も同時に身に付けさせたいと考える。

### ３．２．「マンボNo.5」について

「マンボ No.5」（ペレス　プラード作曲）は，曲想に大きな移り変わりはあまり感じられないが，ア→イ→イ→イ→イ→ウ→ウ→エ→オ→オ→カ→カ→ア→キ→キ→キ→クという楽曲の構造になっていて，反復が多用されている。また，ラテン音楽特有のリズムがあり，シンコペーションのリズムがリズミカルで誰もが楽しめる陽気な曲の感じを生み出している。このリズミカルな曲の感じをどれだけ演奏で表現できるかということが楽しさでもあり，また難しいところでもある。

**＜主に使用した教材等＞**

・「威風堂々　第一番」：平成27年度～教科書「小学校の音楽５」（教育芸術社）鑑賞ＣＤに収録された演奏

・「マンボNo.5」平成23年度～教科書「小学校の音楽５」（教育芸術社）鑑賞ＣＤに収録された演奏

・ＤＶＤ「アフリカンシンフォニー　ブラスの祭典ライヴ2006佐渡＆シエナ」（AVBL25517）

・合奏用楽譜：平成23年度～教科書「小学校の音楽５」（教育芸術社）に掲載されていたものに打楽器を加えた。

今回使用する楽器は，①リコーダー②鍵盤ハーモニカ③木琴④低音楽器⑤ピアノ⑥ボンゴ⑦コンガ⑧大太鼓⑨カウベルである。

### ３．３．学習展開の実際

#### ３．３．１．曲の感じをつかむ（第二次の実践から）

これから「マンボ No.5」という曲を学級全体で合奏していくことを伝え，ペレス・プラード楽団が演奏しているＣＤを聴かせた。楽しそうに「アーウッ！」という掛け声を一緒にかけたり，身体を動かしたりしながら聴く姿が見られた。１学期に演奏した「リボンのおどり」（メキシコ民謡／原由多加　編曲）を思い出して，曲の感じが似ていることに気付き，「マンボNo.5」はどこの音楽なのかを尋ねてくる子どもがいた。また，「踊りの音楽ではないか」と発言する子や合奏することを想像して「難しそう」とつぶやく子もいた。キューバの音楽形式をもつ踊りの音楽であり，「リボンのおどり」と同様にラテン音楽であることを全体で確認した。

次に，合奏用の楽譜を配布し，器楽用のＣＤを聴かせた。子どもたちが２つのＣＤを聴き比べて気付いた点は，①使われている楽器が違う。②掛け声のタイミングが違う。③終わり方が違う。（ペレス・プラード楽団の演奏の方が盛り上がって終わっている）等々であった。

#### ３．３．２．演奏するイメージをもつ

子どもたちは，今回初めて学級全体で合奏をする。あらかじめ予想していたが，子どもたちはこの曲を演奏するイメージがなかなか沸かない様子であった。

そこで，ＤＶＤ「アフリカンシンフォニー　ブラスの祭典ライヴ2006佐渡＆シエナ」を視聴させた。観客を巻き込んで会場全体で「マンボNo.5」を楽しんでいる指揮者，演奏者たちの様子に子どもたちは釘付けになった。ここでは，見た感想などはあえて書かせていないが，子どもたちにとって大きな刺激となったことは，ＤＶＤを視聴している子どもたちの表情から見て取れた。「難しそうだな」という雰囲気が一変して，「早く練習したい」という雰囲気になった。このＤＶＤは，後にも合奏をしていく過程で，何度か自分たちの演奏の参考にするために見ることになった。

#### ３．３．３．同じ楽器を担当する仲間で集まって練習する（パート練習）

担当する楽器を決めてからそれぞれのパートごとに

集まって練習を始めた。「パート練習→全体で合わせる」を繰り返し行い，曲の始めから終わりまで少しずつ演奏できるようにした。パートごとに集まっても終始個人練習ばかりしているパートがあったので，パートリーダーを決めて，個人練習ばかりでなく，仲間と合わせる練習も重ねるようにした。すると，次第にパート内に一体感が生まれ，学び合う姿が見られるようになった。

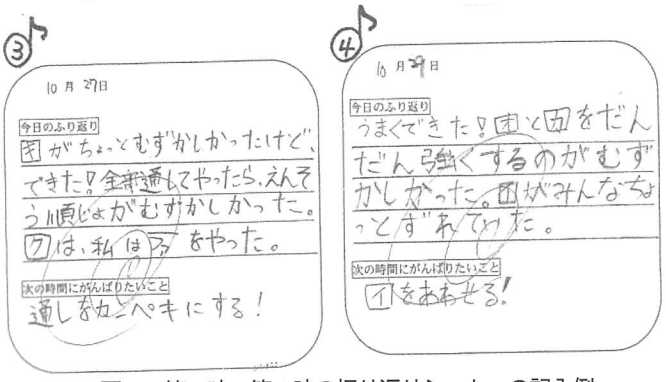


図１　第３時・第４時の振り返りシートへの記入例

### ３．３．４．自分たちの演奏の録画を見て課題を設定する

全体で全曲通して合奏することができるようになった頃，「難しい曲をここまで演奏することができるようになった」という達成感をもつ子も現れてきた。振り返りシートにも，「完璧だから次にがんばることはもう何もない」と書いている子どももいた。しかし，実際には，揃っていない所があったり，強弱が付いていなかったりするため単調な演奏になっていた。そこで，自分たちの演奏に足りないものは何かを探らせたいと考えた。その際の授業記録が以下である。

教　師：楽器のメンバー同士で集まってください。今，一曲通してみたんだけど，もうちょっとこんなところに気を付けていこうと思うことはないですか。
ゆうた：完璧。
なつお：無い。
こうじ：録音して聴きたい。
教　師：どこを録音して聴きたいの？
こうじ：アの部分。
教　師：アの部分どんなふうに演奏したいのかな？
こうじ：本物みたいにしたい。
教　師：どうしたら本物みたいになるのかな？
しんた：テンポを速くする。

こうじが言う「本物」というのは，これまでに繰り返し聴いてきたＣＤに録音されているプロの演奏（ペレス・プラード楽団）を指している。その後，この意見によって周りの子も「自分たちの演奏を録音して聴いてみたい」という話になり，ビデオを撮ることになった。

録画した自分たちの演奏を視聴した後の授業記録を以下に示す。

（自分たちの演奏を録画したものを視聴する）
教　師：「アの部分を本物みたいに演奏したい」とこうじくんは言ってくれていたよね。本物の演奏と何が違うのかな？
かずき：本物のはもっと盛り上がっている。
教　師：どうしたら本物みたいに盛り上げられる？
しんた：もう一回ＣＤ聴いてみたらいいんじゃない？
（　ペレス・プラード楽団が演奏するＣＤを聴く）
教　師：聴いてみてどうかな？どうしたら本物みたいに盛り上げられそうかな？
しんた：もっと曲全体を速く演奏したい。
は　る：もっと音を強くする。アクセントのところ。
ゆ　き：でも，リコーダーとか強くしたらピーってなるよ。鍵盤ハーモニカも難しくない？
かずき：打楽器は大きく出来ると思う。
ゆうた：「アー！ウッ！」の掛け声が小さいから，みんなでもっと大きな声を出すといい。

このように，アの部分をもっと盛り上げるために，主に，速くする・強くする（アクセント）・掛け声を大きくするが出された。この話し合いの後，それらに気を付けて演奏したところ，今までと演奏が変わった。速くしたことでリズムも軽やかになり，リズムに乗って演奏できるようになった。

### ３．３．５．表現の仕方を工夫して演奏する

次に，「マンボ No. 5」の特徴でもある反復の多さに着目させることにした。これまでも一次の鑑賞で聴いた「威風堂々　第一番」や１学期に「ボレロ」（ラヴェル作曲）など，反復のある曲を鑑賞している。強弱を変化させながら反復する表現の仕方に気付かせたいと考えた。

「マンボ No. 5」では，子どもたちが，アの部分に着目して表現の工夫を考えていたので，今度は再度出てくるアの部分に視点を当てさせた。２回目のアの部分でさらに盛り上げるために，２回目のアの前にあるオとカの部分を取り上げることにした。

本時の課題は，「アを盛り上げるためにオとカを工夫して演奏しよう」である。鑑賞で学んだことを思い出すことで，「アに向かってクレシェンドしていく」「だんだん盛り上がるように楽器の鳴らし方を工夫する」「リコーダーや鍵盤ハーモニカなどは，演奏する人数を変えて強弱をつける」等の意見が出されるのではないかと予想していた。しかし，実際には，子どもたちは２回目のアをさらに盛り上げたいという思いはあま

りなかったようであった。「オとカの部分をだんだん強くしていく」という意見は一人の子から出されたものの，全体の課題とはならず，オとカの表現を意欲的に考えようとする子どもの姿があまり見られなかった。

## 4．授業の考察

①合奏をしていて行き詰まると，「CD聴いてみようよ」という意見が出され，何度かCDを聴く場面があった。楽器編成は異なるが，プロの演奏家のCDを聴くことによって，曲の感じをつかませるだけでなく，学びの意欲を高めることができたと考えられる。

②アからイの部分に入るところが何度演奏してもなかなか揃わなかった時，プロの演奏家によるDVDを見てタイミングを確かめる子どもたちの姿があった。プロの演奏家による演奏映像（DVD）は，子どもたちにとって合奏を創り上げていく上での参考になることがわかった。

③始めは個人練習をしていた子もパート練習をすることによって教え合いが生まれ，リーダーの子を中心にパート内のつながりが強くなった。難しいと感じたのは，担当する楽器によって必要とする練習時間が異なることであった。予想はしていたが，今回は打楽器を担当する子どもが時間を持て余してしまった。また，「パート練習→全体で合わせる」を繰り返したので，一曲合わせられるようになるまで単調な授業の展開になってしまった。振り返りカードは，子どもたちの練習の進み具合をみとる材料として活用することができた。「ここがまだできない」と書いている子，自分のことだけでなく，「もっと全体でここに気を付けて演奏したい」ということを書いている子などがいた。（図1）今回は，練習の進行状況を書くことに重点を置いたが，振り返りシートが本当に意味のあるものであるのかも含めて，これからもっと振り返りシートの在り方について研究したいと考える。

④この題材全体を通して，子どもたちの学びが最も深まったと感じたのは，自分たちの演奏を客観的に聴いた時であった。もう完璧に演奏することができていると感じていた子どもたちも客観的に聴くことによって「思っていたよりも揃っていない」「盛り上がるところがない」などと感じることができた。プロの演奏と聴き比べる必要性を子ども自らが感じ，試行錯誤しながら仲間と演奏する子どもの姿から，録画して客観的に聴く活動を取り入れることは効果的であったと言えるだろう。今回は，「本物みたいに演奏したい」という一人の子の意見があったため，プロの演奏と聴き比べることを自然に取り入れることができたが，聴き比べることの意義についてはこれからも探っていきたい。

⑤「オとカの部分の表現を工夫して演奏しよう」という課題を設定したが，反復の表現の仕方を工夫させたいという教師の思いが強く出てしまった。教師が考える学びの筋と子どもが学びたいと考える学びの筋が異なってしまった。何を子どもたちに学ばせたいのかを教師自身がもっと明確にもった上で，複線的に授業の展開を考えていく必要があると感じる。

## 5．成果と課題

### 5．1．成果

（ア）振り返りシートを活用することで，一人一人が自分の演奏を振り返りながら練習順序を考え，技能を高めていくことができた。

（イ）同じ楽器を担当する仲間同士で集まってパート練習をする場面では，パート内で音を揃えようと何度も練習したり，分からない所は教え合ったりする等，仲間と共に学び合う姿が見られた。本題材の最後の授業の振り返りをした時，「わたしは今まであまり友達と何か一緒にすることは好きじゃなかったけれど，同じリコーダーの友達と一緒に練習して上手にできるようになれたので良かった」と発言した子がいた。教師が指導しないとできないこともちろんあるが，子ども同士で学び合うことの大切さを実感した。

（ウ）演奏を録画して，客観的に自分たちの演奏を聴くことで，新たな課題が生まれ，主体的により良い音楽を求めていこうとすることができた。

### 5．2．課題

上記のように，主体的に合奏に取り組もうとする子どもたちの姿は見られたが，「音を揃える」「間違えずに演奏する」「テンポを速くする」等への意識が強かった。強弱や演奏の仕方なども工夫させたいと考え，投げかけてはみたが，なかなか主体的に活動することができなかった。もっと楽曲分析する力（リズムの変化や旋律の動き等に気付ける力）を育てていく必要があるのではと感じている。今後，表現の工夫をして演奏したいと子どもたち自身が思えるような器楽の活動の在り方を探っていきたい。

参考文献
・柳生力（1978）「学級におけるリコーダー指導の研究」音楽之友社
・ブレーメン音楽研究所「マンボ No.5　器楽合奏用スコア―」ブレーメン